

# 人形姫

山本幸久

最終回

十四

「社長」

エレベーターが開いてでてきたのは〈紅顔の美少年〉だった。ここ最近、本社に足繁く通っているフィギュア事業部のスタッフだ。段ボール箱を積んだ台車を押して、こちらにむかってくる。

「これ、どこに置きましょう？」

「とりあえず、このへんでいいよ。まだあるよね」

「台車であと二台です。熊谷くまがいさん達がいまから運んできます」

ここは鐘撞かねつき市郊外にあるショッピングモールだ。明日から五日間、二階の特設会場の一角で、人形づくりの実演をおこなう。そのための準備を閉店直後のいまからはじめるのだ。最初の予定では熊谷良隆よしたかとふたりきりでするつもりだった。いままで日本橋のデパ

ートなどで、おなじイベントをおこなうときはいつもそうだった。本社の職人達は年寄りだらけで、夜遅くに働かせるわけにいかないし、荷物を積んだりおろしたりするには体力が必要だからだ。

だが今日はちがう。フィギュア事業部のスタッフが数人、いっしょに準備してくれることになったのだ。恭平きょうへいや良隆が命じたのではない。むこうからゴールデンウィークのイベントでなにか手伝うことはありませんかと、言ってきたくれたのだ。

「あれ？」間近まできた紅顔くんが桜井桃枝ももえに気づく。そしてさきほどの恭平とほぼおなじ質問を口にする。「なんで桜井さんがここにいるんです？」

「社長に直接、伝えたいことがあって」

トーキョーローカルサイキックについてのいいニュースだ。だが具体的な内容をじつはまだ恭平は聞いていない。私も準備を手伝いますので、会場にいきましょうと桜井に促され、二階にあがってきたばかりなのだ。

「それってトーキョーローカルサイキックの映画化のことですか」

「なんで知ってるの？」桜井は声をあげた。動揺とまでいかずとも、だいぶ驚いているのはたしかだ。「関係者以外は秘密なのに」

「いや、あの」そんな彼女に、紅顔くんはたじろきながらも答えた。

「ずいぶん前からネットで話題になってたんで、冗談半分で言っ

みただけです。まさか正解だなんて思ってもいませんでした。すみません。あ、だいじょうぶです、ぼく、口堅いんで。SNSに書き込んだりしません」

「そんなに我慢しなくてもいいわ。明日の昼には本国で正式に発表されるし」

「本国ってアメリカ？」

「決まってるじゃないですか、社長」桜井に訊ねたのだが、答えたのは紅顔くんだ。「ハリウッドですよ、ハリウッド。あっ。待っててくださいよ。関係者以外は秘密なのに映画化決定を事前に知ってたってことは、それってつまり桜井さんは関係者なわけですよね。だとしたらネットのあの噂もホントですか」

「そうよ」桜井は小さくうなずく。

「マジっすか。すごくないですか、社長」

いきなり同意を求められ、恭平は面食らうばかりだった。その顔を見て、紅顔くんは察したらしい。

「まさか社長、桜井さんの噂を知らないんですか」

「うん、まあ」

「ウチでトーキーローカルサイキックのフィギュアをつくるっていうのに、ちゃんと情報を収集しとかなきゃ駄目ですよ、社長」

「すまん」恭平は素直に詫<sup>わ</sup>びた。行方不明になった弟の後始末と会

社の今後のことで忙殺されていたのだと反論したところで、言い訳  
としか思われまいだろう。

「その映画の衣装デザインを私が担当することになったんです」桜  
井が言った。照れ臭そうにしながらも、ちよつと誇らしそうだった。

「そりやすごい」

「すごいんですよ、社長。大拔擢だいばつてきですよ」紅顔くんは自分のこと  
のようによろこび、あだ名どおりの顔をさらに赤くした。「おめでと  
うございます、桜井さん」

「ありがとう」

「ハリウッドのスタッフと仕事できるなんて光栄です」

紅顔くんの銜てらいのない言葉に、さすがに桜井は恥ずかしそうだ。

「仕事の拠点をむこうに移すんですか」

「とんでもない」桜井は首を横に振る。「この先もむこうで仕事があ  
るかどうかはわからないもの。勝手に日本から追いださないでちよ  
うだい。いまのアトリエに引越してまだ四ヶ月も経っていないし」

そのときスマートフォンが鳴る音がした。紅顔くんのだった。

「熊谷さんからです。どうしたんですかねえ」恭平にそう言っ  
てから、紅顔くんは電話にでた。「もしもし。え？ 二階ですよ、二階。  
いやだな、どう間違えればそんなとこまでいっちゃうんですか。シ  
ョッピングモールで道に迷うなんて、わけわかんないですよ」スマ

スマートフォンから良隆の声が聞こえる。「わかりました。いま、ぼくが  
迎えにいきますんで、そこを動かないでくださいよ。いいですね」

迷子になった熊谷良隆を迎えに紅顔くんが去ったあと、台車に積  
んだ段ボール箱を恭平がおろすと、なにも言わずに桜井も手伝いは  
じめた。

「悪いね、桜井さん」

「いいんですよ。だって社長がひとり作業しているのを、ぼんや  
り立って見ていたら変でしょ」たしかに変だ。「それに私、個展や発  
表会で、作品の搬入搬出は他人に任せずに自分でやりますからね。  
こういうの慣れているんです」

その言葉に嘘はなかった。段ボール箱を抱<sup>かか</sup>え持つときに、腰が入  
っていて、危なっかしいところは微塵<sup>みじん</sup>もないのだ。つぎに粘着テ  
ープを剥<sup>は</sup>がし、段ボール箱の中身をだしていったのだが、これまた  
手際がよくて早い。

「たしかにいいニュースだな」

黙って作業をしているのもなにかと思い、言った方がいいが、桜井  
はこちらに背中をむけ、はっきり聞き取れなかったようだ。

「なにか言いました？」

振りむきもせず、手を休めることもなく、桜井が聞き返してき

た。

「いや、だからさ。きみのハリウッド進出。いいニュースだつて」

「なに言ってるんですか、社長。私のことなんかどうだつていいんです。トーキョーローカルサイキックが映画になれば、フィギュアの需要が増えるのは間違いないでしょう。つまり森岡人形が儲かるつてわけです。私がいいニュースだつて言ったのはこのことですよ」

「なるほど」

「反応薄過ぎますつて。もっとよろこんでくれると思ったのに」

「よろこんでいるさ。いまいち実感が湧かなくて、上手に感情が表現できないだけだよ」

「ほんとですか」

そこで桜井がふりむいた。射るような目つきに恭平は気圧けおされてしまう。

「嘘ではないが、ただ」

「ただなんです？」

桜井が鋭い口調で促してくる。ウチで働いていたときよりも、ずっと勝気だ。フリーで、まさに女手ひとつで仕事をしてきたからかもしれない。

「映画になったからといって、フィギュアの需要が増えて、ウチが儲かるだなんて、そんなにウマくいくかなつて、思つてしまうんだ。」

もちろんそのための算段はするし、社員にハッパもかけるさ。ハリウッド映画に関わるともなれば、本社の職人達も士気があがるだろうしね。でも社長の俺が浮かれてちゃ駄目だと思っただ。獲らぬ狸の皮算用をして、糠ぬかよろこびにおわったら虚むなしいだけだ。しくじったときのことも考えておかなくてはならない。弟の件なんてまさにそうだ。工場を建設するはずだった国にクーデターが起きたのは不運だった。でもそこまで考えて、事を進めていればよかったものを、成功して儲かる未来だけを夢見て、あちこち借金をしていたわけだからね。おかげで毎日ドタバタだよ。でもまあ、それを弟ひとのせいにするつもりはない。社長の俺が気づかなかったのがマズかった。反省しきりだよ」

余計なことまで話してしまった。途中で気づいたのだが、止まらなくなったのだ。いまの気持ちをだれかに聞いてほしかったというものもある。だがなにも桜井にしなくてもよかった。

「悪いな。せつかく、いいニュースだと教えてくれたのに、素直によろこべないばかりか、つまらん話まで聞かせてしまった」

「なんか社長っぽいです」

「社長だよ、俺は」

「昔と比べてずっと、社長らしくなったってことです」

「昔って、きみがウチの会社をやめたときくらい？」

「あんときは全然、社長らしくなかったです。職人さん達の顔色ばかり窺<sup>うかが</sup>って」

「その点はいまもおんなじさ」

「でも職人さん達は社長を信じています」

「どうだろ。相変わらず自分勝手なひと達だよ」

「社長を信じているからこそ、自分勝手ができるんですよ、あのひと達は。喩<sup>たと</sup>えて言うならば猛獣使いが猛獣をじょうずに飼い馴らししているようなもので」

桜井にすれば、褒めているつもりだが、そうは聞こえない。

「それ、ウチの職人達には言わないでくれよ」

「言っちゃいましたよ」

「いっ？」

「一昨日です。それこそトーキョーローカルサイキックの日本人形の打ちあわせで本社にいったって」

「らしいね」その話は良隆に聞いていた。恭平は今日までの五日間、代官<sup>だいかん</sup>山<sup>やま</sup>でフィギュア事業部全員の面接をおこなっていたので、本社に顔をだすのは朝晩だけだったのだ。「ランチに鐘撞駅前の中華料理店から出前をとって、みんなで食べたんだろ」

「そのときに話したんです」

「職人達は怒ってなかったかい？」



「怒るどころか大受けで、そのあと猛獣だったら自分はないかって話で盛り上がりました。宮沢さんはライオン、阿波三姉妹は女豹、熊谷さんはそのまま熊とか、あとなんだっけかな。今度、本人達に訊いてみてください」

訊けないって、そんなこと。

「なににせよ、きみもウチの会社をやめてよかったってことだよな。ハリウッドから声がかかるくらいまで出世できたわけだし」

「出世だなんてそんな。それに人生、よかったも悪かったもありません。会社をやめていなければ、それはそれでべつの人生があったでしょうし」

桜井に恨めしそうな目で見られ、恭平はどう答えたらいいのか、わからなかった。

「王子様でした」

夜中の十二時近くだ。ショッピングモールの準備が二時間もかけずにおわり、良隆の車で自宅まで送ってもらい、風呂に浸かる気力もなく、シャワーだけ浴びて寝ようとしたところで、スマートフォンが震えた。久佐間からの電話だった。そして挨拶もそこそこに彼がそう言ったのだ。なんのことかわからず、ベッドの上で胡座をかき、首を捻るばかりである。

「慎次しんじさんの連れです」久佐間はつづけて言った。「東南アジア系の男性」

「王子様って、あの国の？」

「三年前に来日して、東京にある国立大学で日本語の勉強をしていたそうです。ところが自国でクーデターが起きてしまった。父親である国王とは連絡がつかない、どうしたものかとまごついているうちに、自国から新政権の手下が日本を訪れ、新宿のホテルに軟禁されてしまった。そこを逃げだし、慎次さんのマンションを訪ねていくと東京にいないほうがいいだろうと言われて」

恭平は我が耳を疑った。とても現実の出来事とは思えず、気づけば「ほんとですか」と口走っていた。

「ほんとです。王子様本人が、私よりも流暢りゅうちやうでキレイな日本語で、さつきまで話をしてくれました。いまはとなりの部屋で寝ています」  
となりの部屋で寝ている？

現実離れをしているうえに、まったくもって状況が飲みこめない。  
そこで恭平は、なによりもいちばん知りたいことを訊ねた。

「弟は？」

「申し訳ありません」久佐間は先に詫びた。「今夜、函館はこだてのクラブに出演するDJが慎次さんらしいという情報を仲間のひとりが得てきましたね」

久佐間は元探偵だ。以前いた職場で、すでに引退した同僚に協力を仰ぎ、弟を捜してくれているのだ。

「そのクラブの周辺を今夜の八時くらいから張っていたんです。中に入るにも客層は二十代が中心の若者だけですからね。平均年齢が六十五歳のウチらじゃあ、ひとりだって目立ちかねないので、やめておきました」

情報に間違いはなかった。午後十時過ぎに、クラブの楽屋口から弟がでてきた。ひとりではない。東南アジア系の男性も含め、男四人女三人だった。そのグループはクラブとおなじ繁華街にあるファミレスに入った。

「おとなしく表で待っていればよかったです、ここで方かたを付けようと、気が急せいたのがいけませんでした。仲間とファミレスに入って、慎次さんがいる窓際のテーブルへむかうと、その途中で気づかれてしまいました」

「慎次に逃げられたわけですか」

「面めん目ぼくありません。王子様のほうはファミレスの中で捕まえることができたんですが、慎次さんは我々をふりきって表に飛びだしてしまいました。仲間と手分けして一時間以上捜し回ったのですが、結局見つからずじまいで。とはいえまったく諦めたわけではありません。いまもまだ仲間がふたり、聞き込みをしまわっています。」

必ずや慎次さんを」

「もういいですよ」

「はい？」

「慎次を捜すのは今日でオシマイにしてください。いろいろとお手数かけて申し訳ありません。アイツもいい年の大人です。あとは本人の意思に任せましょう。久佐間さんにもそろそろ戻っていただき、本来の仕事をしてもらわないといけませんし」

少しの沈黙のあと、久佐間の押し殺した声が聞こえてきた。

「ほんとにいいんですか」

「はい」

「わかりました。五代目がそうおっしゃるのであれば、ここまでにしましょう。仲間にも話しておきます」

「お仲間のみなさんにはどれくらいお支払いしたらよろしいですかね。だいたいの額を教えてくださいと助かるのですが」

けっっこういい値段だった。社員の行方調査など経費で落ちまい。社長の弟ともなれば尚更だろう。ここは自腹を切るしかあるまい。さすがに恭平は弟を恨めしく思った。それはさておきだ。

「王子様はこれから先、どうなるのでしょうか？」

「つい先日、親父さんである国王と連絡が取れたそうで、明日には新千歳空港から香港に、そしてイギリスへむかうと言っています

しんちとせ

ホンコン

た。慎次さんのおかげで新政権の追手を撒くことができた、とても感謝しているとも」

「弟はD Jをしながら、王子様と逃避行していたわけですか」

「まさにそのとおりです。まったくもって慎次さんには感心しますよ。親身になって困ったひとの面倒を見るという点では四代目とおなじです。俺が探偵の仕事が嫌になって、四代目に相談しにいったときもそうでした。ならばウチで働けばいいとおっしゃっていたらいて、あれこれ手助けしていただいた。やはり親子ですなあ」

親身になって困ったひとの面倒を見るのは、大いにけっこうだ。だがそのせいで大勢のひとが迷惑を被こうむつてるではないか。

とは言わずにおいた。言うべき相手は久佐間ではない。弟の慎次だ。

王子様の件にケリがついたのだから、久佐間に見つかっても逃げなくてもいい。弟は自分がいなくなって、会社がどういう状態になっているのか、わかっているにちがいない。実家と本社がある百五十坪弱のこの土地すべてを担保に五千八百万円、銀行から借りたのが、恭平にバレたことでもある。だからこそ逃げたのだ。だが逃げどこへいこうというのだろう。どこにも行き場はないはずだ。

電話を切って、ベッドに横たわる。しかし寝付けない。すっかり目が冴えてしまったのだ。寝酒に発泡酒でも呑のもうと思ひ、自室を

でる。階段を下りかけ、ふと思いつき、踵きびすを返して弟の部屋にむかう。ドアを開け、灯りを点けた。

フィギュアや雑誌、DVDにゲームソフト、年代物とも言うべきゲーム機やビデオデッキ、パソコンなどがところ狭しと詰めこまれたその部屋は、二十年来変わっていない。当時は弟をオタク野郎と莫迦ばかにし、恥ずかしく思っていたものだった。しかし恭平が高校でボート部の活動に励み、東京の西のハズレの大学に通い、小田原おだわらの会社に就職し、熱海あたまの芸者と結婚したものの、浮気をされて離婚をするはめになり、おかげで男のモノが役立たずになるまでのあいだ、弟はこの部屋に引きこもりながらも、自らの才能を発信することで世界と繋がり、人脈を広げていたのだ。この部屋こそが弟の戻るべき場所なのだ。

帰ってこい、慎次。

帰ってもう一度、やり直すんだ。

「坊ちゃんっ」

宮沢の叫ぶ声に、恭平はぎよっとした。以前は五代目と呼んでいたのに、ここ最近坊ちゃんなのだ。フィギュア事業部の子達の前でもそう呼ぶ。いちいち直すのも面倒なので、そのままにしているが、さすがに恥ずかしかった。

なにせここはショッピングモールの特設会場で、人形づくりの実演中なのだ。思わず筆先が震え、人形の眉を描き損じてしまう。休日の昼間だけあって、昨夜に拵こしらえた作業台のまわりには、けっこうな人集ひとだかりができていた。恭平の手元にスマートフォンをむけるひともしも幾人かおり、しくじったところを撮られたにちがいない。これまた恥ずかしい。さらに恥ずかしいのは宮沢がひとびとをかきわけ、自分に近づいてきたことだ。

「すみません、通してください。ごめんなさいよ」遂ついに宮沢は恭平の前まで辿たどり着く。「大変です、坊ちゃん」

「どうしました？」と言わざるを得ない。

「きました」

もしかして。

「慎次が帰ってきたんですか」

「ちがいます」

ちがうのかよ。だったらそんな血相を変えて駆け寄ってこなくてもいい。

「だれがきたんです？」

「溝口みぞぐちさんが母親を連れてきたんです」

「赤塚あかつか麻由美まゆみさんが？」

「もうじきここにきます。どうしまししょう？」

どうもしない。大変でもない。だが恭平の父親と赤塚麻由美とのあいだにはなにもなかった、つまり溝口真純ますみは恭平の父親の娘ではないと宮沢にきちんと話しておくべきだったとは思う。

「せっかくいらしたのであれば、会って話をしてきましょう。申し訳ありませんが、宮沢さん、私と代わってもらえますか」

「私がですか」宮沢が目をまん丸に見開く。「でも私、こんなたくさんの人の前でなんかしたことありませんし」

「頭に顔を描くだけです」

人形づくりの表演はいつも恭平の役目だった。宮沢に任せなかったのは、昼日中でも酒の匂いを漂わせていたからだ。でも正月に東京駅で怪我けがをしてからは酒を口にしていないはずだ。家で晩酌ばんしやく程度は嗜たしなんでいるかもしれないが、少なくともいまは酒臭くない。

「それにほら」恭平は宮沢の耳元に口を近づけ、小声で言う。「ここで実演をすれば、男雛女雛おひなめひなコンテストの票が増えるかもしれませんよ」

恭平の背後の壁には、宮沢に峰みね、そして溝口が描いた男雛女雛の絵が貼ってあった。作業台の隣には投票箱が設置されており、フィギュア事業部の子がビラを配ってもいた。

「でもどれが私のだって言ったらマズいでしょう？」

「口にだして言わずとも、コンテストのおなじ顔を頭に描くのは



かまいません」

「なるほど」宮沢はにんまり笑った。「やらせていただきます」

「ほんとひさしぶりい」それならそうと早く言ってくればよかつたのに「ナイショにしたなんて真純ちゃんもひとが悪いわねえ」

宮沢と交替し、二十メートルも歩かないうちに、阿波三姉妹がはしゃいでいるのを見つけた。ショッピングモールはどこも往来が激しいので、邪魔にならないよう、端に寄ったのかもしれない。三姉妹に、溝口が囲まれているのに気づく。その隣に五十代後半と思しき女性もいっしょであることもだ。そちらへ足をむけると、溝口と目があった。

「社長」彼女がそう呼ぶと、三姉妹が一斉に振りむく。

「こちらの方、覚えています？ 五代目。昔、森岡人形で働いていらしてね。そりゃあもう、腕がいい頭師だったのよ。四代目がべた褒めで宮沢さんや峰さんが嫉妬しつとしたくらい」

「覚えてないわよ、スウ姉さん」二女の勢津子せつこが咎めるとがように言う。「二十年以上も昔だし、あの頃、頭師だけでも十人以上もいたから、本社に居場所がなくて、自宅で作業してたんだもの」

「そうそう」三女の多香子たかこが同意する。「麻由美ちゃんが会社に顔だすのって、月に一回あるかないかだったでしょ？ 完成した頭

を取りにいく係が宮沢さんでさ。あら、でもなんで宮沢さんだったのかしらね。あの頃は会社に若手の職人がいくらでもいたのに」

「宮沢さん、麻由美ちゃんがお気に入りだったのよ」須磨子すまこが下卑ひた笑みを浮かべる。「ウチまででむいて、大学出たての若くてピチピチのお嬢さんに、ちよつかいだそうとしてたんじゃない？」

「やあねえ、男って」勢津子が苦い顔になる。

「ちよつかいだされた、麻由美ちゃん？」

多香子が訊ねた。冗談めかした口ぶりでも目つきは鋭い。彼女だけではなく、姉ふたりもだ。とんだ女豹どもである。

「そんなこと、ありませんって。宮沢さんにはとてもよくしていたきました」

旧姓赤塚、いまは溝口麻由美が下衆げすな質問をさらりとかわす。にこやかに微笑ほほえみながらだ。そして恭平を正面から見据えると、「溝口真純の母です」とお辞儀をした。「娘がいつもお世話になっております。まだまだご迷惑をおかけするでしょうが、今後ともどうぞよろしくお願いします」

「いえ、こちらこそ」

改めて見るとよく似た母子だ。顔かたちもそうだが、負けん気の強さが隠し切れず、滲にじみでているところでもある。

「母が森岡人形で働いていたってこと、隠してたわけじゃないんで

すよ。でも母の名前をだしたら就職するのに、なんかその、影響がでちゃうかもって」

「言わないほうがいいと私が言ったんです」母親が娘をフォローする。「あんなにお世話になっておきながら、いきなり姿をくramsすように辞めた元社員の娘なんて印象がよくありませんでしょう」

「そんなことは」ありませんと恭平は最後まで言えなかった。阿波三姉妹に遮かざられてしまったのだ。

「そりやそうだわ。五代目はご存じないでしょうけど、麻由美ちゃんがやめたあと、大変だったんですよ」「そうそう。四代目がカンカンでね。不機嫌ったらありやしなかった」「ひと月以上、その状態がつづいて、みんな迷惑したものよ」

阿波三姉妹があっけらかんと言う。そのくせえらく毒を含んでいた。まさに溝口の母親の言うとおりである。もしも溝口真純が彼女の娘だとバレていたら、入社するのは厳しかったにちがいない。

「溝口さんがつくった雛人形ですが、やはりお母様がなにか助言なさったのですか」

「いえ、なにも」母親は首を横に振る。「娘が大学で雛人形をつくっていたなんて、知りませんでしたので」

「前にも話しましたが、家にあつた雛人形をニューヨークの姉に奪われて、あんまり悔しいもんだから、自分のをつくることにした

んです。それでまあ、一年近くかけて出来あがったのを写真に撮って、母にLINEで送ったんです」

「あれには驚きました。顔なんて四代目が描いたのと瓜二つでしたからね。我が娘ながらたいしたものだと。そのあと電話で、私が森岡人形で働いていた話をしたんです」

「だったら早く言ってくればよかったのにつて、思わずそんなとき怒っちゃいましたよ。あの顔をつくるだけで三ヶ月かかったんですからね」

「昔、あなたが小学生の頃に話したって言ったでしょう。忘れてたあなたがいけないのよ」

「おぼえてるわけじゃないじゃん、そんな昔の話」

溝口がふてくされる。こんな表情はじめて見た。母親の前にして、素がでてしまったにちがいない。そんな彼女を見て、恭平は気持ちが悪くなった。すると身体にも変調をきたした。鼓動が早くなり、顔が赤くなっていくのを感じる。さらにそれだけではおさまらなかった。股間こかんが熱くなってきたのだ。

嘘だろ。

「でもまあ、おかげで森岡人形によりいっそう興味を持って、できれば働きたいと思うようになって、ちょうどタイミングよく友達に誘われて、バイトをはじめたのがフィギュア事業部だったわけです

けど」

「あっ」突然訪れた身体の変化に、恭平はうつかり妙な声をだしてしまった。

「どうしました、五代目？」「顔が赤くなっていますよ」「熱でもでたんじゃない？」

「なんでもありません。だいじょうぶです」

阿波三姉妹に答えながら、恭平はなんとか笑ってみせる。だが内心は穏やかではない。できればますますぐトイレに駆けこみたい。実際、そうしようとしたときだ。

「五代目っ」峰だ。肩を怒らせ近づいてくる。「宮沢さんが人形づくりの実演してるじゃないですか、あれはどういうことですか？」

「コンテストにだした顔を描いているにちがいないわ」票を集めようって魂胆こんたんよ」「コスいなあ、宮沢さん」

阿波三姉妹が峰の怒りを煽あおった。そうやって面白がっているのだ。

やれやれ、まったく。

「わ、私も実演、さ、させてください」

「だいじょうぶですか」峰には即売会で実演してもらはずが、手が震えて作業ができなかった過去があるのだ。

「できますっ。五代目の心配はわかります。たしかに私は緊張しい

です。人前にでたら震えてしまいかもしれません。でも何事もやってみないことには」

「私もお願いします」溝口が申しでた。「峰さん、いつしよにやりましょうよ。ひとりよりふたりなら、少しは緊張しないで済むかもしれませんよ。なんでしたら宮沢さんを含めて三人並んでやるのもありかも。どうです、社長？」

溝口は小首を傾げ、顔をのぞきこんできた。何気ない彼女の仕草がやたら艶なまめかしく見えてしまい、恭平は慌てて目をそらす。そのあいだにも、股間のモノがみるみるうちに形を変えていくのがわかる。

「ぜひそうしよう」声の上うわ擦ずってしまった。みんなが不審な目をむける。だがもう気にしていられない。「すまないが、ちょっとお手洗いにいってくる。いまの話のつづきは、戻ってきてからでもいいかな」

「わかりました」

溝口の返事をろくに聞かず、恭平はその場を離れ、トイレを探した。

かくして恭平は男として復活した。

しかし十年も使用不可能だったモノが、なんの前触れもなく、機

能しはじめたことによるこびよりも、戸惑いのほうが大きかった。  
この先もずっと使えるのかどうかという不安もあった。

復活した翌日から三日連続、朝にはそびえ立っていた。だからか  
どうかかわからないが、ひとに話したら正気を疑われるほどに濃厚な  
淫夢いんむを見た。そこには溝口真純や桜井桃枝があらわれた。昼間にシ  
ョッピングモールで彼女達と会うときなど、どんな顔をしていいの  
か、困り果てた。しかも話していると、そんなつもりはないのに、  
モノの形が変わってしまうのだ。

どうやら十年ものあいだ、ご無沙汰だったせいで、性欲が自己制  
御しづらくなっているらしい。さすがにいきなり襲いかかるような  
真似はしないものの、女性とふたりきりになるのは、しばらく避け  
たほうがいいように思えた。弟が行方不明で、社長が犯罪者にでも  
なったら、いよいよもって森岡人形はオシマイだからだ。

ショッピングモールでは五日間、人形づくりの実演をする予定だ  
ったが、恭平はお役御免となった。宮沢と峰、そして溝口の三人が  
やるようになったからだ。緊張しいで心配だった峰も、溝口の提案  
どおりに三人揃ってやれば、ふだんとおなじように作業ができてい  
た。昨日などひとりずつ交替で実演していたが、それでもだいじょ  
うぶだったくらいだ。三人になってから、見るひとの数も恭平のと  
きより増えた。

その盛況ぶりを見ていた阿波三姉妹が、私達にもさせてくれと言  
いだした。そこで今日明日は彼女達のみならず、頭師以外の職人み  
んながそれぞれの実演をおこなうことになり、いよいよもって恭平  
は邪魔になってしまったのである。経理の幸田こうだは、各々が実演を  
する傍らかたわで、作り方の説明をするガイド役だ。

昨日は実演の合間に宮沢を呼びだし、ショッピングモールのフー  
ドコートフードコートの片隅で、溝口真純が父親の隠し子ではないことを教えた。  
久佐間も同席し、探偵だった頃、父親の依頼で赤塚麻由美の行方調  
査をしたことを話してもらった。それでもなお、宮沢は納得がいか  
ない様子で、だけどあの子、目元が四代目に似ていると思うんだよ  
なあとひとりごちていた。

復活後、四日目の朝も元気だった。六時半に目覚め、五分後には  
ガレージにいた。

一艇いっぺいありて一人いちにんなしつ、一艇ありて一人なし。

胸の内で、呟つぶやきながらローイングマシンを漕ぎつづける。汗をか  
くにつれ、モノは治まっていく。

七時にはウチをでて、曳ひきぬき抜川がわにかねばならない。鐘撞高校ボ  
ート部の朝練に参加するのだ。恭平が高校の頃は、ゴールデンウイ  
ークともなれば連日朝練で、雨でも学校の体育館でトレーニングに



励んだものだった。だがいまはボート部にかぎらず、部活の朝練は週二回以下と決まっていた。休日は自由参加、もしも顧問やコーチが参加を強制した場合、事と次第によってはクビになるという。

朝練は十一時まで、そのあとは代官山へいく。引越し業者がくるのだ。ゴールデンウィークが明けたら、引越しの準備に取りかかる。そのために休み中ではあるが、現場を見て、見積もりをだしてもらおうのだ。

先週、フィギュア事業部のスタッフ全員と面接をおこない、事情を話した。まだたしかではないが、感触としては五十人のうち、七割は残ってくれそうだった。想像していたよりも多い。平均年齢が二十五歳とみんな若くて、ほとんどが独り身だというのが大きいかもしれない。その他にも、在宅勤務やフレックスタイムなどを認めてくれるのであれば、というひとと数人いたので、これから先、説得するつもりだ。

慎次について文句や悪口を言うひとはいた。でも憎んではいなかった。それどころかみんな弟の身を案じていた。自ら命を絶つなんてことはありませんよね、と心配するひとまでいた。

なんだかんだ言って慎次は好かれていたのだ。見栄っ張りで頼りなくて、自分勝手に、それでもフィギュアを人一倍愛していた彼を憎めずにいるのだ。

ローイングマシンを漕ぎおえ、汗だくになった。タオルで顔を拭ぬぐい、身体ほての火照りが冷めてからスウェットの上下を着て表にでる。家の前にひとがいるのに気づく。むこうも恭平のほうを見た。目と目があう。

「慎次っ」

そう呼ぶと同時に弟は踵を返し、走りだした。

思ったよりも弟の足が速かった。だが休日の朝で町には人影がほとんどなく、車の通りも少ないおかげで、弟を見失わずに済んだ。

次第に弟が疲れてくるのが、目に見えてわかるようになった。基礎体力がないせいで、スタミナが切れてきたにちがいない。大枚叩はたいて購入したローイングマシンをじゅうぶんに活用しないからだと、恭平は胸の内で毒づく。だいぶ距離が縮まった。ダッシュをかけたければ、じゅうぶん捕まえられるほどである。だが恭平は速度を緩め、

あと十メートルの間隔を保つことにした。さらに弟の足が遅くなり、恭平にすればいつものジョギングより楽なくらいになる。

いつまで経っても恭平が追いつかないことを、さすがの弟も不審に思ったらしい。ふりむく回数が増え、なんでだよ？ という顔つきになっている。

「そこを左に曲がれっ」

恭平が叫ぶと、弟は嫌がる素振りも見せず、そのとおりに走っていく。

「ペースが落ちてるぞっ。姿勢が悪いのが駄目なんだっ。顎あごを引いて、胸を張って、腕を振れっ。そうすれば自然と足が動くっ」

これまた弟は恭平の言うとおりにした。ほんの少し速くなる。

「そのまま曳抜川に向かえっ」

「兄貴っ」

「なんだ、なんか文句あるかあ」

「いろいろ迷惑かけて、ほんとに悪かった。謝る。このとおりで許してくれ」

「謝って済む問題かっ。だったらどうして逃げた？ 王子様を守るためもあったかもしれない。でもおまえ自身が逃げたかったんだろ。うが。許さんっ。ぜったいに許さないからな」

「ご、ごめんよ、兄貴っ」弟が涙声になる。

「ほんとに悪いと思っただったら、この先、死ぬ気で働けっ。今度、逃げたら承知しないからなっ」

「俺、また森岡人形で働いていいのか」

「おまえはクズだ、とんだ大莫迦野郎だっ。おまえのせいで会社は危うく潰れかかったし、この先だっでどうなるかわかりやしない、

だけどおまえが帰ってくるのを、みんなが待っているんだ、ありがたく思えっ」

恭平は足を速め、一気に追いつくと、弟の顔を覗きこんだ。頬はすっかり瘦け、目の下には隈ができて、両頬には涙の流れたあとがくつきりあった。酷い形相だ。なにはともあれ、帰ってきてよかった。だがそれを本人に言うのはいまではない。

「兄貴、ありがと」

「謝るのも礼を言うのもまだ先だ。まずはその気持ちを態度で示せ、仕事で表せ」

「イッテイアリエイチニンナアアシツ、イッテイアリエイチニンナアアシツ」

曳抜川の土手にでると、かけ声が聞こえてきた。鐘撞高校のボート部が列をつくって走っていたのだ。

「あの子達といっしょに走るぞ。おまえもこいつ」

「俺はもう」弟はだいぶ息があがっていた。

「なんだ？ 走れないとでも言うのか」

「は、走るよ」

「トレーニングにもつきあえ」

「マジでっ」

「マジだ。まだある。そのあと俺とボートを漕ぐぞ」

「兄貴とふたりで？ 無茶だよ」

「ガタガタ言わずにやるんだ。わかったな」

「いや、でも」

「返事は？」

「はいっ」弟は大きな声で返事をする。自棄<sup>やけ</sup>っぱちになっているにちがいない。

「イツテイアリテエイチニンナアアシツ、ほら、おまえも言え」

「イツテイアリテエイチニンナアアシツ」

「イツテイアリテエイチニンナアアシツ」

一艇ありて一人なし。

ボートだけではない。人形づくりも会社もこの世のすべてがそうにちがいないと恭平は改めて思う。

そして今日が新たな船出であることも。

〈おわり〉